

生理学者横山正松と戦争（上）

福島県立医科大学人間科学講座 末永 恵子

はじめに

科学・技術の成果が、無条件に普遍的な人類の福祉に結びつけられるような考えは、第2次世界大戦やその後の冷戦期に姿を消した。科学・技術が生物・化学兵器・原爆などの軍事目的に使用された事実がある。アジア太平洋戦争期の日本の基礎科学も例外ではなく、「科学報国運動」なる言葉が生まれて基礎系の科学者も動員され、戦争協力を行った。

特に科学者の動員の中で問題なのは、731部隊に代表される細菌戦を目的とした生体実験や、外科手術経験の乏しい軍医の再教育を意図した生体解剖である [1]。このような戦争犯罪は、日本軍が侵略していった地域で組織的に広く行われていた。しかもそのことは、当時の医学関係者の間では公然の秘密であった [2]。しかし、戦後に犯罪の証拠が提出されても、医学界における戦争犯罪についての検証と反省は十分になされていない。

日本生理学会に即して言えば、陸軍技師として731部隊に赴任し、中国人に対して人為的に凍傷を発症させる実験を行った吉村寿人の場合に端的に現れている。彼は、戦後戦犯として罪を問われることなく、京都大学・兵庫県立医科大学にアカデミックポストを得、京都府立医科大学学長にまで登りつめた。学会も、Japanese Journal of Physiology に731部隊における研究成果“Studies on the Reactivity of Skin Vessels to Extreme Cold”（「厳寒に対する皮膚反応についての研究」）の掲載を許している [3]。この論文には、中国人苦力や中国人児童に加えて生後3日（“the 3rd day after birth”）の新生児を被験者にしたことが明記されている。この赤ん坊は、毎日中指を0℃の氷水に30分間漬けられた時の反応を調べられた。そ

して生後1ヶ月と生後6ヶ月における皮膚温を記した結果が論文中の表にある [4]。このような大人でも苦痛を伴う実験に新生児を使用することは、戦前・戦中の常識からしても問題を有していたことは、贅言を要しないであろう。

吉村は法的に裁かれもせず、学会で処分されることもなく医学界の重鎮となったのである。戦時の違法な生体実験が免責され、検証と反省の機会を逸していることは、日本の医学界にとっての損失であると筆者は考える。過去と真摯に向き合うことから、未来への教訓は生まれるからである。

吉村は、731部隊での犯罪について自ら次のように弁明している。

個人の良心によって部隊長の命令に反する行動は絶対に許されなかった時代である。しかも私が戦時中に属していた部隊において戦犯行為があったからとて、直接指揮官でもない私が何故マスコミによって責められねばならないのか、全くのお門違いの事であり… [5]

吉村の言うように、上官の命令を拒否すること自体、大日本帝国の軍隊組織において困難であったことには首肯する。しかし、戦前から国際法は、命令であっても犯罪と知りつつ実行した個人には相応の責任があるとしている。吉村の主張する論理では、国家の最高責任者ひとりだけが責任を負えばよいことになるからである。

軍隊で命令は絶対とされてはいたが、僅かながら命令された生体実験を拒否し、非人道的な行為を回避した軍医も存在した。その事実こそ、個人の良心が軍隊内でさえ消失しなかった証左である。

本稿は、その稀有な存在である、もと軍医で生理学者の横山正松を紹介し、彼がなぜ命令を拒否

できたのかその理由を、彼自身の著述や家族の文章をもとに経歴に注目しながら考察したい。

生い立ち

新潟県のほぼ中央部、信濃川の中流域に位置する小千谷市は、川の大きな蛇行部の河岸段丘に発達した町である。小千谷縮と錦鯉の養殖で全国にその名を知られる。

横山正松は、1913（大正2）年11月19日に父常次郎・母ヤスの3男として、この北魚沼郡小千谷町に生まれた。彼は、上には長男の常松、次男の久平、長女の千代、そして3男の正松、下に次女の美代、4男の哲夫、3女の喜代という兄弟姉妹



横山正松 福島県立医大にて
(1970年代 『いいじ正松』口絵)

の中で育った。生家は、米と養蚕用の桑の葉を生産する貧しい小作農家であった。

横山家は、先祖の横山紋二郎にちなんで、附近の人からは「紋二郎どん」と呼ばれていた。正松の姉の千代は「紋二郎は小作人ではありませんでしたが、お米も小豆もたくさん作っていましたが、自由にならなかったのか、又小遣いは1銭もなかったのか、塩ボタ餅でした」と現金収入が少ないために砂糖入りのぼた餅を味わえなかったと回想している [6]。

戦前の新潟県は、巨大寄生地主の王国として知られる。地主が徴収する小作料は、表1に示すように収穫料の6割を超す現物納であった。多額の借金を背負っている農家も多かった [7]。

そのような事情から新潟県は、木崎村争議に象徴されるような農民運動の拠点であり、農民組織による小作料減免や耕作権の確立に向けて運動の盛り上がりを見せた県でもある。

小千谷小学校

正松が入学した小千谷小学校は、日本で最初の公立小学校である。1968年（明治1）10月1日に当時の柏崎県が認可した小千谷校（振徳館）を前身としている。日本の近代学校制度は、明治5年の「学制」頒布に始まる。しかし、そのおよそ5年前に、小千谷に公的小学校が発足していたのである。これは、全国に先駆けて1869年（明治2）に小学校を次々に開校させたとされる京都府の取り組みよりも半年以上早いものである。

学校設立の背景には、戊辰戦争の後の社会的混乱があったとされる。戦火の舞台となった長岡藩から長岡藩士の家族の多くが小千谷に難を逃れて

表1. 大正初期の北魚沼郡における小作料（『小千谷市史下巻』p.174より）

等級	小作料 (石)	最近5カ年間実取小作料 (石)	5カ年平均産額 (石)	小作料率 (%)
上田	1.110	1.055	1.700	62
中田	0.940	0.940	1.500	60
下田	0.750	0.700	1.100	63

きたが、小千谷民政局は、小千谷の人々に「賊徒」を匿うことを禁止する布達を出した。小千谷の人々からの支援を絶たれた避難民たちは、困窮の極みにあったことが想像される。このような状況下、裕福な縮商人・山本比呂伎は、新政府に敵対した藩の幼少の者が、飢えと寒さの中に放浪しているのは、見聞きするに忍びないと述べ、近在の子弟と分け隔てなく、彼らを「御一新後之赤子」として公教育を授ける場として学校を創設することを当時の柏崎県知事に建白したのであった。学校運営の経費としては、5年間で金千両を寄付したいと申し添えている。

山本の熱意に動かされ、知事久我通城は、1968年（明治1）10月1日付けで設立を認可し、ここに小千谷における公教育が発足したのであった。

このような学校設立の背景には、江戸時代から幕末にかけて小千谷の豊かな学問・文化の風土が形成されていたことが考えられる。江戸時代中期頃から縮織の物の集散地としての経済力を蓄え、商取引を通じて全国各地と交流が行われた。そのため文化的・学問的文物・人物の往来も盛んに行われることとなる。寺子屋や私塾も開設され、教育環境も整備されてきていた。このような風土を背景に、教育に恵まれない幼少者への救済を目指した千谷校設立は実現した。

1871年（明治4）、柏崎県は小千谷校を県の分贖として認可した。その後、制度改革で校名は変化し校舎も転々としたが、正松が入学した頃の正式名称は、新潟県北魚沼郡小千谷町小千谷尋常高等小学校であった。

正松の母は気が強く小学校の成績も良く、父もまた尋常小学校を飛び級で卒業し、県知事から表彰されるほどであったという。正松も両親の素質を受け継いだためか、小学校6年間の成績は、「甲甲甲の連続」であった [8]。

家族・親戚・知人が正松について綴った追悼文集『いいじ正松 [9]』（いいじとは、家族が正松を呼ぶ時の呼び方で、小千谷地方で弟を呼ぶ呼び方「オジ」から変化した言葉と思われる）は、情愛深く、いきいきとした少年時代の正松の姿を伝えている。

横山家の子どもたちは、学校から帰ると暗くなるまで外で農作業の手伝いをした。春は桑畑で桑の葉を1枚ずつ摘んだ。子どもの低い背丈では、桑の木にぶらさがるようにしてつみ取った。根気のいる仕事であったが、1貫匁（4キログラム）摘んでも2銭だったという [10]。

秋は米の収穫に忙しい。姉の千代は当時を回想して次のように述べている。

「時々正松はサボってハサ（稲をかけるところ）の上に腰掛けて母に怒られましたが、母は顔では怒っても腹の中は笑っていたようでした。嬉しそうでした」

稲が実り、それを家族総出で収穫することの喜びがあった。

二階建ての横山家には、各階に1つずつしか電灯がなかった。その二階で正松少年は集中して勉学に励んだ。しかし、尋常小学校卒業後の進路を決定しなければならない時になって、父は経済的な事情から正松を就職させるか進学させるかで躊躇した。長兄・次兄ともに中学進学は断念していた。逆に母は、進学に理解があり、積極的に正松の受験勉強を応援した。深夜まで正松が勉強していても、母は針仕事をして、決して先に寝ることはなかったという。彼は、地元の小千谷中学校に1番の成績で入学した [11]。

小千谷中学校

当時の全国の尋常小学校を卒業した男子児童の中での中学進学率は13.8% [12]、親の経済力が大きく影響していた。比較的富裕層に属する者が中学進学者には多かった。入学当初のことを正松はこう回想している。

小千谷中学に入学した時のことを思い出します。英語の最初の時間に級主任の小木曾先生が私にABCD…を読めと云いました。私の家は百姓で貧しく、親、兄にアルファベットを知っているものはなくABCD…が読めなく立往生しました。小木曾先生はすぐ私のことを察知したのか自分でABCD…から教えますじめました [13]。

中学3年生の時、彼は急性骨髄炎で入院し、数

回の骨の手術を受けた。この医療費は、横山家の家計に大きな負担を強いることにもなった。その時の経験から、貧しい人のために医者になろうと決心したという [14]。

病後の正松に、お昼も温かいものを食べさせたいと、母は毎日昼時に中学校に弁当を届けた。正松は、家族に支えられて勉学にいそしんだ。

旧制新潟高等学校

闘病のため1年間留年したものの、その遅れを取り戻そうと猛勉強し、4年生在校時（修業年限5年）に旧制新潟高等学校理科乙類に合格した。だが、合格はしたものの父は、学費を心配して入学させるのを躊躇した。横山家の遠縁には、「紋次郎どんのいいじ、ドーズル学校なんかに行かんで働いた方がいいぞ」と言う者もいた。

しかし、元小千谷町長の島田博が「服や帽子、靴や本は、俺の子のお下がり全部くれてやるし、毎月援助もしてやる」と支援を申し出、入学が可能になったという。姉の千代は「それからというもの、私達、父、母、私、妹は、島田さんの家の前を通る時は最敬礼をして通りました」と述べる [15]。

島田博（1868年〈明治1〉～1945年〈昭和20〉）は小千谷町上ノ山生まれで、新潟師範学校を卒業して教員生活十余年、後に長岡市助役、南魚沼・三島・北蒲原・中頸城各郡長となり、さらに1924年（大正13）から小千谷町名誉町長を勤めた。加治川治水事業を完成させ、堤防に植えた桜並木は、のちに多くの観光客を集めることとなった（1966年〈昭和41〉の洪水で桜並木は消滅）。

島田の人柄が偲ばれるエピソードのひとつに次のようなものがある。彼は、新潟県庁学務課に勤務中、たまたま来県した皇族の接待のため、宿泊先の旅館で碁の相手をするよう課長から命じられたことがあった。けっして勝ってはならぬと注意されたのに、かれは勝ってしまった。翌日知事室へ呼び出され、本日より出仕に及ばずと解雇状を渡された。しかし、後日長岡市の助役に拾い上げられ、ふたたび官吏の道を歩むことになったという。

彼はまた回天と号して絵をよくした。町長在職中に町長邸に町の有力者や文人墨客百余名が集まって観桜会を催し、詩を詠じ、句を作って歓を尽くした風流人でもあった [16]。正松の進学は、島田のような文化・教育に理解の深い篤志家の尽力にも支えられた。

父の死

新潟高等学校在中の1932年（昭和7）、彼は父を亡くす。6月4日、田で鋤を振るっていて脳溢血で倒れ、家に担ぎ込まれたが、そのまま翌日に息を引き取った。母は、これからどうして生きて行けばよいのかと号泣したという [17]。しかし、気丈な母は、一家の大黒柱を失った悲しみから立ち直り、家族を支えていった。

正松は、苦学しながら1934年（昭和9）新潟高校を卒業し、翌年新潟医科大学に進学した。彼は新潟市の松岡家に下宿し、松岡夫妻の2人の息子の勉強を見る家庭教師となった。ある時、長男穰にチフスの疑いがあると知ると、正松は大学病院での初診から入院手続きまでを行い、毎日講義がおわると伝染病棟に来て夜まで付き添ったという。また、中学校の期末試験の折、風邪による高熱で寝込んでいた穰を起し、「俺と一緒にいくから試験を受ける」と言って受けさせた。キャンプに行った時、譲が湧き水で枝豆を洗っていると「流れた豆は全部拾いなさい、食べ物粗末にしてはだめだ」と正松は叱った。彼は、松岡家の子どもたちにとって兄のような存在であった [18]。

病理学者川村麟也

正松は、新潟医大で「良き師、良き友にめぐまれた」と言う [19]。

正松が、当初影響を受けたのが、恙虫病研究の第一人者であった病理学教授の川村麟也（1879年〈明治12〉～1947年〈昭和22〉）である。川村は、山梨県北巨摩郡塩崎村（現甲斐市）生れで、第一高等学校を経て東京帝国大学医科大学を卒業、ただちに病理学教室に入った。1908年（明治41）ドイツとイギリスに留学のため渡欧、1911年（明治44）4月、新潟医学専門学校病理学教室の初代教

授(1922年より新潟医科大学教授)に任ぜられた。

恙虫病は、病原体の *Orientia tsutsugamushi* を保有しているアカ恙虫の幼虫に吸血されると1~2週間の潜伏期間を経たのちに高熱を発生し、リンパ節が膨張し全身に発疹ができ、治療が遅れると死亡することもある病である。日本では古くから新潟県信濃川および阿賀野川、山形県最上川、秋田県雄物川流域に発生していた。

川村は、恙虫病に罹患した患者の惨状を目にして、教授就任当初よりその撲滅に志している。当時は未だ病原体は明らかになっておらず、臨床・病理の面でも未解明の部分は大きかった。

当時恙虫病の解明を目指し、各地の研究者が激しい先陣争いをしていて、その途上で多くの研究室関係者の犠牲が出ていて、新潟医大でも4名が研究室内感染で死亡していたのだった。正松は、1、2年生の時に、恙虫病の免疫療法に取り組む川村の研究室に出入りしていた。

そんなある日、川村教授は、「今軍部から特殊実験を要請されている。これをやれば講座研究費の十数倍が入るが、人道に反すると考えて断った。君たちも将来同じ問題にぶつかるかもしれぬ、おれの言ったことを忘れるなよ」と言った。

この「特殊実験」が何であったか不明である。しかし、恙虫病に関するものであった可能性は否定できない。当時この病は、死亡率50%と言われ、恐れられていた。

ともあれ、その実験要請は、川村によって非人道的であると判断され、拒否された。莫大な研究費というアメを見せられても川村の意志は、動じなかった。そして、人道に反する実験は決して行ってはならないという実践を伴った教訓は、正松の脳裏に刻まれたのであった。医学研究者を志す初期段階におけるこのような体験は、後に意味をもつようになる。

川村の研究者および教育者としての存在感は、新潟医大においてひととき大きかった。川村は、1924年(大正13)に「類脂肪の研究」で帝国学士院賞を受賞し、恙虫病研究の業績に対し浅川博士奨学賞を受賞するなど、輝かしい業績を挙げている。

また『病理総論』(草間滋との共著)・『恙虫病の研究』などの著書を出版していた。1936年(昭和11)学長選挙に出馬した川村は、最有力候補と取り沙汰されていたにもかかわらず、附属病院長の整形外科学教授・本島一郎に敗れる。この選挙結果は、卒業生で作られた学士会の会員の多くにかなりの衝撃を与えたという。

翌年川村は、親友の慶応義塾大学教授・草間滋の死去にともない、その後任として慶大病理学教授及び北里研究所部長として新潟を去ることとなる。川村を慕った学生たちは、転出後も病理学の講師として川村が講義を担当することを希望し、1937年(昭和12)2月下旬本島学長に嘆願運動を起こしたほどであった[20]。したがって、川村転出のため正松は、師事することはできなかった。

生理学との出会い

しかし、正松は魅力的な別の研究分野に出会う。それは、生理学であった。当時生理学第一教室は、一風変わった雰囲気があったと想像される。教授横田武三は、「在任中一本も論文を著さなかった希代の師[21]」と言われるが、研究上の指導・示唆・忠言はよくその核心をついていたという。また、学生の教育には熱意を持ち、生理学のほかに早朝・放課後に語学・数学・物理学の課外授業を行った。横田は特に語学にすぐれ、独・仏・英・ギリシア・ラテン・中国語にも造詣が深かった。「一般の社会事象の判断や批判についても、つねに一家言をなし、寸鉄よく人をつく独自の風格を具えて」いたと評されている[22]。

この横田門下の福原武は、新潟医大を1928年(昭和3)に卒業、1930年(昭和5)に母校の生理学第一教室の講師となった。彼は、腹窓法による消化管運動の研究で成果をあげ、1933年(昭和8)には助教となる。

腹窓法と活動写真を併用した研究手法で、内臓運動の理解を深め、小腸運動、胃、大腸、尿管、卵管、子宮にまで対象を広げている。これらの研究は「新潟の腹窓法」として生理学界で有名になった。また、福原は心臓の興奮伝導の研究も手がけ、1935年(昭和10)頃から、His束切断実験などの

方法により心臓刺激伝導系の研究に携わるようになっていた [23].

演劇と文学

正松は、新潟医大の演劇研究会に属し、またゲーテを愛読する文学青年でもあった。福原は演劇研究会の会長であり、チェーホフの作品を愛好していた。彼は、学生としばしば演劇論、哲学論をかわしたという。

当時の生理学研究の最先端を走り、かつ文学にも造詣の深かった福原に対するあこがれもあり、正松は生理学を専攻するようになったと考えられる。

また、医大の同級生で、演劇研究会のメンバーの北村四郎は、大学の枠を越えた市民劇団「劇団新潟」を作って、新劇を公演するようになり、正松は北村の劇団運営を手伝った。

のちにこの活動がもとで北村は、治安維持法違反容疑で逮捕されることとなる。この劇団についての取り調べ書には、「昭和十一年頃、北村四郎（新潟医大より参加し現在責任者）、角文雄等は相謀り、新潟医大内部に劇団新潟の有力なる支持組織を確立し、演劇理論の研究を通じて学生を共産主義方面に結集する目的を以て「新潟医大演劇研究会」を組織し、爾来毎月一回乃至二回校内池原記念館及教室等に於て研究会を開催し、イプセン、ハウプトマン、ヴィデキント、チェホフ、久板栄二郎等の作品並に著書をテキストとして共産主義観点より研究し、会員相互の啓蒙、意識の高揚を図りつつありたり [24]」と記されている。

北村は、もとより共産黨員ではなく、共産主義的思想の持ち主ですらなかったが、逮捕され、9ヶ月以上にもわたって新潟警察署の留置所に拘留された [25].

北京へ

一方、北村逮捕の前年の1939年（昭和14）3月、正松は新潟医科大学を卒業するとすぐに国立北京大学医学院の生理学教室助手に就任するため、北平（北京）に出発した。正松が北京に赴く2年前の1937年（昭和12）7月7日盧溝橋事件が

勃発し、北平は7月28日陥落した。

北平の大学生は、すでに抗日民族統一戦線の方針を掲げ、北平学生救国連合会を結成していた。北京大学と北平大学医学院の学生は連合救護隊を組織して、大学校舎を負傷兵用の病院とした。多くの女子学生は看護の短期訓練を受けて、負傷兵の看護に当たったという [26].

占領時の様子について、北京にいたエドガー・スノーは次のように描写している。

日本軍が北京を占領すると、この町から脱出しようと思いがち足掻きが始まった。しかしもう手遅れであった。北京をとりまく古いダツタンの城壁も、占領前には虚しいながら安心感を与えていた。しかしこの冷酷な現実には直面すると檻になってしまった。天啓の時代がやってきたのだ。人々は宣告を待つ囚人のような気持ちになった [27].

日本軍の傀儡政権である中華民国臨時政府が、華北地域を統治することとなり、北京大学・清華大学・北平大学などの国立大学は、その管理下に入ることとなった。この政府は、のちに汪精衛を戴く維新政府に合流する形で解散し、この維新政府のもとで、華北政府委員会として終戦まで華北地方の運営を司った。

『北京大学校史』は、日本軍の北京大学占拠を以下のように記している。

8月25日、日本の憲兵隊が北京大学に入り、第二院長室に来て検査を行い、売国奴組織の地方維持会もまた北京大学等の大学責任者を召集して談話をした。9月3日、日本軍は北京大学第二院と「灰楼」という新宿舎に進駐した。10月18日、地方維持会は北京大学を「保管」という布告を第二院校門に掲げた。北京大学はこれより8年の長きに亘り日本軍とその手先の手に陥った。「紅楼」はひとたび侵略者の憲兵隊本部となるや、その地下室は愛国志士を拘禁・迫害する所に利用された。中国語学文科の入口には、「小隊附属将校室」の門札が掛けられ、文学院院长室扉の標識は、「南隊長室」となった。北京大学は、日本の侵略者の破壊と蹂躪をこうむる所となっ

た [28].

かつて北京大学は、抗日救国運動の拠点であった。廬溝橋事件後、在職していた中国人教官と在学生の多くは大学から去った。抗日に志した者のある者は、北京西部の山岳地帯のゲリラ地区に移って抗日ゲリラ戦に身を投じた。また、共産党の根拠地である延安の抗日大学に入学した者もいたという [29].

北京大学自体は、後に国民党政府教育部命令により、清華大学と南開大学と共に南下して長沙臨時大学として開校した。しかし、南京・武漢が陥落して長沙にも戦火が及んだので、さらに奥地の昆明に疎開し、そこに国立西南聯合大学を開校した [30]。新たな教育環境を求めて、教員と学生は長い道のりを経て他郷に赴いたのだった。

優生学者永井潜

一方、北京大学の学舎には日本から研究者が送りこまれた。医学院の主席教授として他の教授の監督にあたったのは、生理学者永井潜であった。1902年（明治35）、東京帝国大学医科大学を卒業後、同大学生理学教室の助教授・教授を経て、1934年（昭和9）12月から停年退官する1937年（昭和12）3月まで医学部長を務めた。そして、当時植民地であった台湾の台北帝国大学医学部の初代医学部長三田定則が総長になったため、退官とともに第2代の医学部長に就任することとなる。台北帝大医学部は、1936年（昭和11）に設置・開校されたばかりで、永井は医学部の運営とともに講座の増設・拡充といった草創期の重責を負うことになる。しかし、医学部長に就任して間もない時期に、永井はその行政的手腕を買われて国立北京大学医学院に是非にと招聘され、1938年（昭和13）に主席教授となった。

永井は、優生学の泰斗であった。優生学は、フランス・ゴルトンが1883年に「優生学」を提唱すると、進化論や優生思想は、「生存競争と自然淘汰」「優勝劣敗・適者生存」の公式のもとに、社会ダーウィニズムとして日本に流入した。永井は、第一次大戦頃から優生思想の啓蒙に積極的に努め、一般向けに優生思想の啓蒙活動を行っている。

例えば、次の文章は『読売新聞』（1913年11月17日）に掲載された『人種改善学の必要を論ず』という講演の一節である。

例えば罪人を防ぐために如何に法律を厳にし、馬鹿な者を少なくする為に如何に教育に注意を払い或は又病気を全滅する為に如何に衛生或は一般医学に苦心致しましても、是は所謂外界の事であります、外からの事であり、夫れでは人生の幸福、社会の安寧ということは得られない、どんなにやった所で所謂砂の上に家を建てようなものであって、其の努力は徒勞である、體質の改良、良い遺伝物質を選んで悪い物質を排除すると云うことでなければ吾人の目的を達することが出来ない、夫れにはどうしたら宜いか、是は非常なる困難なる問題であります、兎に角大方針は其所に置かなければならぬのであります、遺伝物質の悪いのが居る場合は必ず何日か頭を擡げて出て来るのでありますから、若し精神病の系統であるとか、結核に罹り易い系統であるとか、或は不具になる系統、さう云うようなものがあつたならば、成るべくさういう系統を世の中から排除するという方針を以て進まなければならぬのである。

要するに彼の主張は、子孫を残すに最相応しくないと見なされた者が子孫を残すことを防ぐべきだということであった。遺伝的に優れた子孫を残すことが国家の興亡に密接な関係を持つとして、優生学的政策の必要性を政府に対して積極的に提言していた。『読売新聞』（1938年1月28日）は、永井潜が中心となって立法化を提唱していた「断種法」が立案に向けて前進したという記事を掲載しているが、紙面には永井の顔写真とともに「断て！悪い血の泉」、「時代の要望「断種法」を厚生省がいよいよ取り上げ」という文字が躍っている。このようにマスコミは、断種法を時局に適った政策として歓迎し、永井も時代の寵児となっていた。

永井らの主張した断種法は、国会の反対で大幅に修正されたが、1940年（昭和15）、遺伝性精神病などの断種手術などを定めた国民優生法が公布された。

文 献

1. 中央档案馆・中国第二歴史档案馆・吉林省社会科学院編『細菌戦と毒気戦』(中華書局, 1989年)の第1部では、「日軍細菌部隊及其罪行」として、日本軍の細菌戦に関与した戦犯の証言を、第3部では、「滅絶人性的活体解剖」として生体解剖を実施した戦犯の証言を収録している。また、鱒澤彰夫解題:『極秘 駐蒙軍冬季衛生研究成績』(現代書館, 1995年)は、中国人捕虜を酷寒の環境下で敢えて凍傷にし、最終的に解剖を行った軍医の報告書である。筋昭三:「十五年戦争中の軍陣での『生体解剖』の実態」(『北陸医史』17(1), 2006年)は、これまでの生体解剖の証言・記録を検討し、15年戦争当時軍陣で広範囲に生体解剖が実施されていることを明らかにしている。以上のような、軍陣における広汎な生体実験・生体解剖の実施に比して、そのことを証言する者は、極端に少ない。証言を規制する様々な心理的・社会的要因が考えられる。その中で手を下した軍医の中には、内心自己の残虐行為を後悔し、苦しみぬいた人がいたのではないかと考える。筆者の眼を引いた資料に、次のような、軍医の遺族(弟)が綴った文章がある。「兄は、医者として、一人息子が被爆後、毎日衰弱してゆくのをみて、助からぬ事が分かり、非常に悲しんだ。息子が死んだあと(昭和21年9月2日)9ヶ月後に、自らの命を絶った。原因は、軍医として、ビルマ戦線で、軍の命令で生体解剖させられた事だと言う事を、5年前に知った。然し私には、原爆による、1人息子の死も原因の一端であるとも思えてならない」(『日本被団協『原爆被害調査』第2次報告』『日本原爆論大系第2巻』日本図書センター, 1999年, p. 689)この軍医は、戦争における加害と被害の苦しみを一身に背負い、そして、背負いきれずに命を絶つに至ったと考えられる。
2. 吉開那津子『消せない記憶—湯浅軍医生体解剖の記録』(日中出版, 1981年)は、中国山西省潞安陸軍病院において自ら生体解剖を行った湯浅謙の証言をもとに構成されている。同書で湯浅は、軍医になって中国大陸に渡れば、生体解剖を行う機会があることを、医学生時代の頃から既に知っていた、と述べている(p. 65)。また、全国の医学部・医科大学から多数の若手研究者が、海外の防疫給水部に送り込まれているが、その目的について送り出す側は、おおよそ理解していたと考えられる。
3. Yoshimura H & Iida T: Studies on the reactivity of skin vessels to extreme cold. Part I A point test on the resistance against frost bite. Japanese Journal of Physiology **1**: 147-159, 1950-1951. および Yoshimura H & Iida T: Studies on the reactivity of skin vessels to extreme cold. Part II Factors governing the individual difference of the reactivity, or the resistance against frost-bite. Japanese Journal of Physiology **2**: 177-185, 1951-1952. および Yoshimura H, Iida T & Koishi H: reactivity of skin vessels to extreme cold. Part III Effects of diets on the reactivity of skin vessels to cold. Japanese Journal of Physiology **2**: 177-185, 1951-1952. の計3本が一連の研究として掲載されている。ただし、3本目の論文は戦後の研究成果である。著者に加わっている小石英夫は、戦後吉村教室に入室しており、731部隊には全く関係していない。
4. Yoshimura H & Iida T: Studies on the reactivity of skin vessels to extreme cold. Part II Factors governing the individual difference of the reactivity, or the resistance against frost-bite. Japanese Journal of Physiology **2**: 177-178, 1951-1952
5. 吉村寿人:『喜寿回顧』吉村先生喜寿記念行学会, pp 34, 1984
6. 佐藤千代:『いいじ正松』, 横山哲夫編『いいじ正松』私家版, pp 26, 1994
7. 小千谷市史編集委員会編:『小千谷市史本編下巻』小千谷市, 小千谷, pp 430-431, 1967
8. 佐藤千代:『いいじ正松』, 横山哲夫編『いいじ正松』, 私家版, pp 27, 1994
9. 横山哲夫編, 1994年, 私家版
10. 佐藤千代:『いいじ正松』, 横山哲夫編『いいじ正松』, 私家版, pp 27, 1994
11. 佐藤千代:『いいじ正松』, 横山哲夫編『いいじ正松』, 私家版, pp 28, 1994
12. 文部省普通学務局「全国公立私立中学校二関スル諸調査」(大正15年10月1日)『全国中学校二関スル諸調査』(第八巻, 大空社, 1988年所収)。1926年(大正15), 全国の尋常小学校を卒業した男子児童数総計は、979862人。うち中学校への入学は、135574人とある(p. 232)。
13. 横山正松:『シカゴから』『仁五会誌』**29**, pp 3, 1979
14. 横山正松:『若い日の私』『毎日新聞』1986年9月11日朝刊。
15. 佐藤千代:『いいじ正松』, 横山哲夫編『いいじ正松』, 私家版, pp 30-31, 1994
16. 小千谷市史編集委員会:『小千谷市史本編下巻』小千谷市, pp 375-376, 1967
17. 佐藤千代:『いいじ正松』, 横山哲夫編『いいじ正松』, 私家版, pp 31, 1994
18. 松岡 穰:『正松さんの思い出』, 横山哲夫編『いいじ正松』, 私家版, pp 105-106, 1994
19. 横山正松:『若い日の私』『毎日新聞』1986年9月11日朝刊。
20. 新潟大学医学部創立七十五周年記念事業期成会編:『新潟大学医学部創立七十五年史上巻』, 同期成会, pp 607-610, 1994
21. 新潟大学医学部創立七十五周年記念事業期成会編:『新潟大学医学部創立七十五年史下巻』, 同期成会, pp 27, 1994
22. 新潟大学医学部五十周年記念会編:『新潟大学医学部五十年史』同記念会, pp 504-505, 1962

23. 新潟大学医学部五十周年記念会編：『新潟大学医学部五十年史』同記念会，pp 503-504, 1962
24. 「特高月報」昭和15年8月分，明石博隆，松浦総三編：『昭和特高弾圧史1』太平出版社，pp 267, 1975
25. 北村四郎：『激動の中に生きて』考古堂書店，pp 167-204, 1988
26. 北京大学歴史系《北京大学学生運動史》編写組：『北京大学学生運動史 1919-1949』北京大学出版社，pp 151, 1979
27. エドガー・スノー（森谷 巖訳）：『アジアの戦争』みすず書房，pp 2, 1956
28. 蕭 超然，沙 健孫，周 承恩，梁 柱：『北京大学校史 1989-1949』上海教育出版社，pp 213, 1981，原文は中文，未永訳す。
29. 北山康夫：「中国の大学と日中戦争」『歴史研究（大阪教育大学歴史学研究室）』24, pp 34, 1978
30. 楠原俊代：『日中戦争期における中国知識人研究—もうひとつの長征・国立西南聯合大学への道』研文出版，1997